第5次・第6次比国ミンドロ島遠征

佐藤　修史

1988年２～３月に、フィリピンの女性をこよなく愛す酒井さんと、当時、ブヒッド族にしか友達がいないと言われた田村さんにアジテーションされた私は、目的もロクな金も無く、酒井さん自作のエルミタ・マップだけを持ってフィリピンを旅した。おかげでホールドアップによる強盗をはじめとする様々のトラブルに見舞われ、旅行は散々であった。

ところがどういうわけか、フィリピンという国が気にいってしまい、帰国後間もなく来春のミンドロ島民族探検を立案し、同年８月には入部したての１年生、佐々木を連れてその予備調査に再びフィリピンを訪れた。これが私と佐々木の行った第５次ミンドロ島民族探検である。一方先輩の田村さんは、同時期に同じミンドロの別のフィールドで活動したが、ここでは触れずにおく。

この探検は、ミンドロ島中央部から東北部沿岸に流れるアグロバン川上流域でルワン族なる未知の少数民族と接するための予備地域調査であった。我々２人は、現地での聞き込み調査をもとに行動し、入山口付近にあるアランガン族の部落“ブラボイ”に滞在、ここを拠点とした。照れ屋の子供らを中心にコミュニケーションをとるにはとったが、基本的な知識と準備が整っておらず、また雨季であったことも災いして、苦労は絶えなかった。それでもプロテスタント系宣教師の協力を得て、奥地へのガイドを依頼することができた。ちなみにアランガン語とタガログ語を話すガイドだったが、我々はタガログ語もままならなかった。

ブラボイに数日滞在してルワン族の情報を得るのには、期待ほどの結果を得られなかった。よって我々は実際に奥地で、直接的な情報を得ようと試みた。アグロバン川を逆遡ってやろうというわけだ。ガイドは、プッティン・バトゥ（地名）出身のモリノ・男・35歳・アランガン族と、通称“赤パン君”・男・タジャワン族の２人である。こちらが気を遣ってしまうほど気のいい連中で、親切に道案内をしてくれた。ムカデの存在どころか、避けようのないヒルの来襲さえわざわざ注意してくれたほどである。一方、こちらは灼熱の熱帯を、毎日午後２時くらいから必ず降り出すスコールに時折あおられ、四苦八苦であった。特に１年生だった佐々木には相当こたえたようで、初日の目的地リワイェン到着時には、へべれけのマグロのようになっていた。出発前に、田村さんから「昼下がりは行動しないほうがいい」と忠告をうけていたにもかかわらず、気持ちに任せて強行軍を行った私の思い出深い失敗である。

できることなら、この日のうちにタオブイット族の人々に頼み込んで泊めてもらうつもりだったが、バケツをひっくり返したようなドシャ降りに、もはや前進する気力は失せてしまっていた。集落に届かないうちにみつけた一軒家（タオブイット族のものであろう）を今夜の宿だと勝手に決めつけてしまった。この日は、持ってきた恐ろしく塩辛い干し魚と、炊飯に失敗した芯のある飯を皆で食べて早々に寝てしまった。

さて、しかし慣れない２人のすることにミスはつきものであった。さほどのハプニングはあっても、初日のうちにタオブイット族の部落にお邪魔できると思い込んでいたため、食料をはじめとして生活物資が少なすぎた（生活物資は部落調達を原則としていた！）。結局これが決定打となり、我々は翌日早々に引き上げることになった。

ともあれ、来春も突破口となるアランガン族の部落にコネクションをもち、一応の進路選択、またその大まかな様子が掴めた。よって予備調査としての機能は果たせると判断し、これにて終了とした。

後に、佐々木はプエルト・ガレラでバカンスを楽しみ8/27に帰国、私はネグロス島のさとうきび労働者を訪問して、その後病気にひたすら苦しんだが、9/2に帰国した。

もともと私の民族探検は、タジャワン族部落でかなり長期のフィールド・ワークを行っている当時立教大学の院生・Ｏ氏の「アグロバン川上流域には、

樹上家屋で生活する“ルワン族”という未知の民族がいるらしい」との言葉に起因している。第５次の活動はまさにルワン族に焦点を合わせたものだった。ところが前回終了後、私はミンドロ島内部の未開性自体に強く魅かれるようになった。すなわち、ルワン族とは別にできるだけ奥へ、内部へ潜りたいと考えた。そして前回を引き継いでリーダーだった私の意見を反映して第６次ミンドロ島民族探検は、「アグロバン川最上流域の踏査、その過程における民族調査、ルワン族は常に意識し、バゴンの検証も行う。」というテーマとなった。そして最初に特筆すべきは、新メンバーに池田、室賀の女性が加わったことである。ジャングルに突入する以前に物騒なマニラ周辺を恐れてか、これまで５回の民族探検において女性の参加は皆無だった。異性を感じさせない頼もしい連中である。

さて、ヴィクトリア市長の許可のもと、アランガン族の村“ブラボイ”より入山する。前回、奥地へのガイドをしてくれたモリノの息子の看病から始まったここでの生活は、苦労も多かったが愉快なものであった。

基礎的なアランガン語を拾い、会話をすることは一筋縄ではいかないが、友達作りは主にここから始まる。老若男女、こちらから質問して親睦を深めた。子供らは恥ずかしがり屋だが素直で、よく歌を唄う。動物や棒切れで遊ぶ姿をみていると、こちらの心が洗われるようだ。カメラを向けたときの照れる表情がなんとも印象的だった。

実は１人だけだが、英語を解するリノという青年がいた。会話に困ったときの切り札的存在だったが、彼と私はウマが会い、よく時間を共にした。一緒に焼き畑でキャッサバやタロイモを採集したり、釣果を競ったり、商品作物のコーヒー豆を乾かす作業をしたりした。

また、普段この村の夜は早く、９時ともなればたいがい皆寝てしまう。ところが調子に乗って、夜に家を訪問することもあった。奥地の状況を聞こうと話を切り出すのだが、いつのまにか彼らの興味深い話に夢中になって話題がそれるのが常であった。なかでもコブラとの闘い、日本兵の進攻、低地民との土地に関する紛争などは熱中したが、若者小屋（11歳～20歳くらいの男性は集団でここに暮らす）で、持って来たエロ本を披露したときの彼らは最高だった。歌を交歓したりして、真夜中には我々も寝入っていた。

さて、奥地へ行かねばなあ…と思うが、困ったことに今年は乾季の訪れが遅く、日々ぐづついた天候である。アグロバン川は溢れっぱなしで徒渉できる状態ではない。ここを発つ予定の日付けをとっくにオーバーしている。丘

の上から様子をうかがって、少し水がひいたときに出発を試みるが、無理だと主張する現地サイドからはガイドがでない。それでも「行きゃあ、なんとかなるだろ。」と、とりあえず行動したいとの意識から、半ヤケクソの意見に隊員は同調して、頼み込むかたちでガイドを２人依頼した。

気分も天気も晴れないまま、前回同様リワイェンに向かう。水はけの悪い山中は、足がくるぶし付近までドロに埋まる有り様である。逆に「俺たちゃ、ハッピーよ。」と雨天に喜ぶヒルどもが猛襲して、実にうっとうしい。遅いペースではあったが、国内の合宿の多くが雨だったから鍛えられたのか、それとも奥地への希望が強かったのか、着実に前進した。が、だめであった。前回、渡れた川の横断箇所が増水のため渡れないのだ。胸までか？と尋ねると、ガイドは背より深いと言う。ドウドウと大迫力で流れるその様態が、巨大な怪物にも思われた。絶壁に巻道は無く、ブラボイに戻る結果となった。

ブラボイで水がひくのを待つのも限度がある。いったんは、町に戻って全く計画と異なる山からのアプローチも検討したが、様々の要因で断念。結局、再びブラボイ入りすることになる。

雨季が長引いたのが、決定的というより致命的に不運であった。我々探検部員は元来、時間と金にルーズなのだが、このとき今年度の履修申請を蹴ってまでネバる気力はなかった。しかし奥地への熱き思いも捨て切れず、当初の予定とまるで違うブラボイ川からミンドロ島中央部にはいるルートを選択した。とりあえずその上流域には、アランガン族の部落・マウリンがある。そこを目指そう。

出発時は快晴だった。もうちょっと待てばアグロバン川も、と迷いもしたが、若いガイド、ビトゥとルマノを連れてマウリンに向かった。噂通りマウリンへの道はひどく、身体が斜めになるほどだった。斜面のガレ場や丸太を歩くには、常に注意が必要だったため、疲れがくるのが早かった。まめにレストをとりながらの行軍だったが、例によって足はヒルで血だらけだった。

マウリンは地名だったが、そこにはなにもなかった。大きな石が河原に横たわっているだけである。そこでビバークしながら個人別にフィールド・ワークを実行した。佐々木と室賀は、温泉をみつけてルマノとともに実地に観察した。一方、私はビトゥとともにアランガン族の人々が住むという山の上を目指した。興味深いことに道はカムフラージュされていて、沢自体がルートとなっていた。かなり苦労して沢からあがって丘を歩くと、涼しい風が心地よい。思ったより高度をかせいだようである。

再びヤブに入って、そこを抜けると、眼前に要塞がそびえていた。目を丸くしている私をみて、ビトゥがニコニコしている。

「ウリ　ティーパ（ここはどこ？）」

「バノッグ(地名)」

それだけ聞くと、その大きな家屋に目を奪われるばかりで他には何も言えなかった。後に、菊地靖著『フィリピンの社会人類学』で気付くのだが、多くの世帯が一つの大家屋で生活するのがアランガン族の伝統のようである。なかにいた５名は最初驚いていたようだが、すぐになごやかになり、帰るときにはイトス（滕）でできたかごをくれた。より純粋な伝統に触れたことは、非常に有益であった。このような大家屋が残存しているのは非常に珍しいと、帰国後Ｏ氏も感心していた。バノッグを離れた後、さらに奥へ川をつめてもみた。が、不本意ながら時間という限界にやむを得ず、また奥地へのロマンをさらに深めつつ、戻ることになってしまう。

実際のところ、この第６次ミンドロ島民族探検も成功とは程遠い結果である。だが、この探検が私に与えてくれた影響は計り知れない。だからまた、私はミンドロへ向かうつもりでいる。

第５次比国ミンドロ島遠征（ルワン族調査）

［期間］　1988年 8月 3日～ 9月2日
［地域］　フィリピン共和国ミンドロ島
［目的］　ルワン族の予備調査、地域調査
［隊員］　隊長　　佐藤修史　（商学部２年）
　　副隊長　佐々木仁　（商学部１年）

第６次比国ミンドロ島遠征（ルワン族探検）

［期間］　1989年 2月25日～ 4月 8日
［地域］　フィリピン共和国ミンドロ島
［目的］　アグロバン川最上流域踏査、未開民族とのコンタクト、特にルワン族との接触。
［隊員］　隊長　　佐藤修史(商学部2年)　室賀美和(文理学部1年)
　　副隊長　佐々木仁(商学部1年)　池田三津恵(文理学部2年)